

# 地域中核病院におけるMSWの役割と課題

山崎 淑子、三上 優子、鈴木 智子、梶原 稜子、  
遠藤 裕明、秦 温信

札幌社会保険総合病院 医事課 地域医療部

介護保険の導入により、病院におけるMSWの役割も変化してきている。そこで、これまでの業務内容を解析し、MSWの役割と課題を検討した。相談件数からみると看護師を通じた退院援助が多く、患者や家族が退院において何らかの不安や悩みをもっていることがわかった。患者や家族が満足し安心して生活を得るために我々の果たすべき役割として、こうした患者の早期発見と早期介入、他職種との連携や地域におけるネットワークづくりが重要と考えられた。

キーワード：介護保険、退院援助

## はじめに

当院は、札幌市の副都心である新札幌の中核的病院である。病床数は276床であり、1日の平均外来患者延数は約900人である。地域住民、特に高齢者の方々や重篤な疾患を有するの方々への様々な社会保障制度の説明とサポートが必須であり、それらの疑問や要望を解消した上でサービスを行うことが求められている。そこで、いかに利用者の思いをくみとり利用者が満足する医療をうけ安心して生活していけるかという視点から、この2年間を振り返り、ソーシャルワーカーが求められることおよび果たすべき役割を検討し報告する。

## 対象と方法

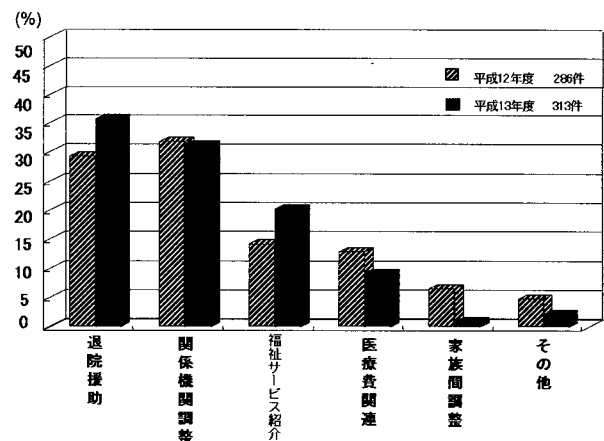
平成12年度及び平成13年度に扱ったケースワーク記録を基に、依頼内容、依頼元、介護保険主治医意見書依頼件数などを統計的に抽出・分析し、当院における相談事例を過去のケースより挙げ、利用者の置かれている現状や制度上の問題点を検討した。

## 結 果

相談件数は増加傾向にあり、平成12年度の相談件数は286件で平成13年度の相談件数は313件であった。その内訳は、平成13年度では退院援助が最も多く、

相談件数313件のうち、112件と全体の35.80%を占め、次に多かったのは関係機関との調整が98件（31.3%）、福祉サービス紹介が64件（20.4%）、医療費相談が29件（9.3%）、家族間調整が3件（1.0%）、その他が7件（2.2%）であった。前年度と比較すると、退院援助とそれに伴う福祉サービスの紹介が増加傾向にあった（図1）。

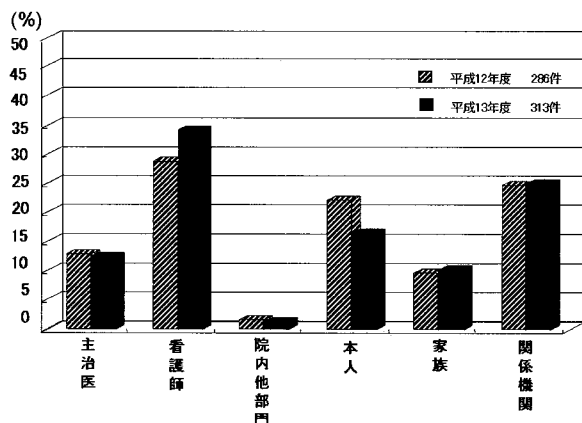
図1：相談内容



また、相談依頼元については、平成13年度では看護師が107件（34.2%）、関係機関が79件（25.2%）、本人が52件（16.6%）、主治医によるものが39件（12.5%）、家族が32件（10.2%）、院内他部門、ソー

シャルワーカー自身による発見が4件(1.3%)であった(図2)。前年度と比較すると看護師からの依頼が明らかに増加していた。

図2：相談依頼元



主治医意見書の依頼件数からみると、平成12年度は289件、平成13年度は295件と著変はなかった。

最も多かった退院援助の事例の中から、当院における他職種他機関との横のネットワークによって、スムーズに在宅療養が可能となった一例をあげる。72歳女性Aさんは、大腿骨骨折を主訴として当院へ入院した。状態は自立度B2痴呆Ⅱaで介護度3であった。手術後リハビリが開始され退院に向けての準備のため、家族より今後利用できる在宅サービスの詳しい説明と具体的な事業所の紹介の依頼があった。家族の希望により在宅療養へと退院準備をすすめていく方向で話しがまとまった。その後、Aさんの状態を考慮し、家族、医師、看護師、MSWとの話し合いで訪問看護、かかりつけ医の往診、ヘルパーの導入する方向となった。退院前には訪問看護師とケアマネージャーに来院してもらい、在宅でのサービス内容や在宅改修、福祉用具のレンタルをも視野に入れ、調整を図り、受け入れ体制の準備が整った段階で退院の運びとなった。

## 考 察

介護保険制度の導入により、利用者の介護に対する選択肢は広がった。しかし同時にその選択肢の多さや制度の複雑さにより生じた利用者の疑問や問題点の対応に、介護支援専門員以外にMSWもその業務に積極的に携わる必要性がでてきた<sup>1)</sup>。また、相談件

数の統計より、相談件数の中で退院援助が最も多かったが、これは井上氏ら<sup>2)</sup>の業務投入割合として退院援助が全体の4割を占め、最も多かったことからみてもその結果は一般的であると考えられる。その理由としては、退院援助の場面では、介護保険の活用を視野に入れなければならなくなり、そのため制度の説明と理解を得るために時間と労力を費やすこととなってきたことが挙げられる<sup>1)</sup>。

ここで挙げた事例が成功した背景には、家族の協力を得ながら皆で在宅療養へ向けて体制づくりを整えたことが大きかったと言える。この事例に関わらず、重要なことは、MSWがいかに患者の生活に根ざしたアプローチをするか、又地域や他職種とのネットワークをいかに構築するかということである。具体的には、患者・家族の価値観やおかれている状況を把握し、家族の取り組みを認め尊重しながら問題解決への支援を行うことである<sup>3)</sup>。また、院内においての支援チームを他機関のチームに結びつける媒介的な役割が重要であり、それを円滑に行うための社会資源の情報収集や、各機関との関係の調整を行うことが重要である<sup>4)5)</sup>。このようなアプローチやネットワークを形成することがMSWの専門職としての特性であり、その実現のためには各専門職種との相互理解や個別援助における面接技法の向上などについて、MSW自身の研鑽や絶え間ない努力が必要である。これらのことが基本にあつてはじめてその特性が生かされ、さらにはMSWの人間力が十分に発揮されることが指摘されている<sup>4)6)</sup>。

我々の地域においては、職種間の連携、協調、相互研鑽を目的とした地域ケア連絡会や糖尿病地域協力会が年に3～4回開催されている。在宅介護や医療、高齢者において身近に起こりうる症例を題材として保健・医療・福祉の多職種にわたる人々がその現状や問題点、今後の在宅療養の在り方について症例検討や意見交換を行い、連携により医療・ケアの向上と協力体制の確立を目指していく会である。ここでは職種間における認識のすり合わせや対処法の違いなどについて学ぶことができる。特筆すべきことは、これらの会を通して地域における多職種の人々との意識の共有や連帯感が生まれるという点である。また、意見交換や横の連携が行われることにより、患者へのフィードバックはより迅速に、またより満

足度の高いものになりうるはずである。実際、これらの会を通し多職種間の連携はより強化されてきている。このような、“患者と地域のネットワーク医療”の関係が成立することで、はじめて患者や家族が安心した生活を得ることができるのではないかと考えられる。

## 結 論

MSWが果たすべき役割と課題として、1. 制度利用を必要とする患者さんの早期発見と早期介入、2. 他職種他機関とのより綿密な情報共有と連携、3. 地域活動、ネットワークづくり、をあげることができる。これらの実現のため現在は多職種間とのネットワーク化を図ることを目的とした地域ケア連絡会や糖尿病地域協力会への活動へ積極的に関与しているが今後も継続的にこの活動への参加を続けていきたいと考える。

## 文 献

- 1) 金子 努、石橋京子、黒木信之、ほか：介護保険検討委員会報告. 医療と福祉 No.71：10-15、2001
- 2) 井上淳子、末永 薫、屋鋪智子、ほか：社会保険病院における医療ソーシャルワーク部門の現状把握と将来展望. 社会保険医学雑誌 41：101-109、2002
- 3) 草水美代子：在宅医療を支えるチーム医療. 治療 80：2345-2349、1998
- 4) 黒川明美：地域への退院援助. 医療と福祉 No.65：15-17、1997
- 5) 土屋友香理、河合由美、近藤尚人、ほか：介護保険施行に伴うMSWの役割（その2）～急性期病院の退院援助を中心に～. トヨタ医報 第12号：75-81、2002
- 6) 高田玲子：チーム医療におけるソーシャルワーカーの役割. JIM 12：749-752、2002

## Role and Tasks of MSW in the Regional Core Hospital

Yoshiko Yamazaki, Yuko Mikami, Tomoko Suzuki  
Ryouko Kajiwara, Hiroaki Endou, Yoshinobu Hata

Hospital affairs Section, Sapporo Social Insurance General Hospital

The introduction of Long-term Care Insurance is changing the role of Medical Social Workers (MSW) in hospitals. We appraised the role and its relevant tasks based on an analysis of the past activities of MSW. In terms of the number of consultations, the greatest need for assistance from nurses was at the time of a patient's discharge. This suggests that most patients and their families harbored some degree of anxiety and worry at that time. Our results indicated that screening and early intervention, as well as keeping in contact with other kinds of practitioners, and thereby forming networks in the region, were important, and contributed positively towards our role of helping the patients and their families lead satisfactory and secure lives.